

——まず、結成のいきさつを教えてください。

石川「メンバー四人が高校の同級生で、卒業の思い出にライブをしようって集まったのがきっかけでした」
——小高さんと石川さんは同じクラスで生徒会も同じだったんですね。

石川「高校一年生のとき同じクラスでした」

——山下さんと合田さんは？

石川「最初はお互いライブ意識を持ってましたね。当時僕はギターをやっていたんだけど、壮（山下）の方が全然上手だったし」

小高「悟（合田）は高校入ってすぐ彼女が出来て、二人で帰ったりするのを見ていろいろ思ってた（笑）」

石川「そういうのでお互い面識あったり意識したりね。それで高校三年の秋、卒業ライブに向けて、一緒にやってくれそうなのやつということから、月に一、二度のペースで集まることから始まりました」

小高「曲もね、せっかくだったらコピーじゃなくてオリジナルを作ろうって。卒業したらばらばらになるのはわかってたから、すげえ一日日が大事で。東京行ってもバンドはやりたかったけど、『どうしてもこの四人で』っていうのはなかった。でも東京行ってバラ色のキャンパスライフが待ってると思いきや全然違っ

くあったからね」

小高「志のみでしたね。プロになる方法はわからない。技術もない。最初はライブハウスのオーディションのテープ審査で落ちる。でもまずは一つ、オーディションに受からうっていう目標ができた。そこからはシンプル。受かったら今度はレギュラーで呼ばれるように頑張ろうとかそれからたくさん受けまくってました」

——じゃあそこからはがんばん受かって？

合田「いや、けっこう落ちましたよ」

小高「後に知るんですけど、ライブハウス文化を。シエルトー、ロフトは通常ブックイングをやってないからそんな資料を送られてきても困っちゃうっていう。当時はわかんないから、とにかく老舗のところに送ってた」

山下「それで客を増やして、インディーのレーベルから出したいとか思っていました」

小高「自主盤で作って、手売りで売って。そのうちだんだんバンド文化や、その界隈の事情もわかってきて。一個一個クリアしていく感じは楽しかったですね。ちゃんと動員も伸びて、自分たちも前に進めてる感じが」

——順調に進みはじめてからみんなプロ一本に絞ろうと？



——いつ頃からプロを目指そうと？

合田「たぶん小高は最初からそういう情熱を持ってたよね。龍は弁護士になりたかったし、俺と壮は東京出て来たばかりで慣れななきゃいけないものがたくさんあって。小高だけ一人先走ってたな（笑）」

小高「先走ってましたよ（笑）」

石川「泣いてたよね、赤ラーク吸いながら『俺はプロになりたいんだよお』って。今となっては笑えるけどけっこうシリアスなムードでね」

小高「その後なぜか二人で花園神社へ祈願に行った気がする……」

石川「情熱というか、気持ちはすご

小高「バンドが機能してきた頃がちょうど大学三年の秋とか冬とかで」

——ちょうど就職活動の時期ですね。

小高「そこが転機でした。僕はエントリーシートすら見たことない」

——就職活動をしないといるんなどころから圧力があつたと思うんですけど、それを振り払ってでもバンドに向かわせたものがあつた？

小高「俺が曲を作って、龍がリーダーで、必然的にバンドを牽引していく中で大学の学年も二人は上だったから、ここで弱気な姿勢を見せたら、悟と壮は迷ってしまうんじゃないかって思ったんです」

石川「僕は自主制作じゃなく、流通にのるレコード屋さんで買えるCDをなんとか四年生やってる間にかたみにしたいって」

小高「卒論書いてるときが初めてのミニアルバム『影と煙草と僕と青』のレコーディング中だったんだけど、こなすことに必死で就職とか考える余裕がなくて。今思うとそれがよかった」

石川「スタジオで卒論書いてたもんね（笑）」

——今年は結成十年目ということですが、これまでに解散の危機はなかったんですか？

石川「解散っていうのはいないけど、僕が抜けようとしたことはありましたね」

—それはいつ頃ですか？

石川「二年前に、『LUNKHEAD』っていうアルバムをレコーディングから始まってツアー終わるまでの丸一年くらいですね」

—理由は？

石川「怪我がでかいですね。怪我ってメンタルに一番ずしってくる。平気で出来たことが出来なくなっただんどん心が暗くなつて。ライブやるのも辛いし。ライブやるのが辛い自分が嫌だからメンバーと顔合わせるのも辛いし」

—そのとき皆さんはどういう話をされたんですか？

小高「俺は、新宿の思い出横丁で二人で飲んでたときに急に言われたんです。それまではこの四人でずっとやってきたから誰か一人欠けてもLUNKHEADじゃなくなるっていうのはずつと言ってたんです。でもそのとき龍がやめて俺はバンド辞めない、解散しないって思ったんですよ。それも本人に言ったし」

石川「お互いにたぶんそこをタブーにしてきたんでしようね。触れられなかったんですよ、このメンバーだったからこそ」

小高「その頃は『じゃあLUNKHEAD辞めます』って言えないところまで来てた。僕らを待ってくれる人たちもいる、責任もある、だから俺は辞めないよって。逆にそれで今四人でいる意味っていうのを

意識できた、だからこそこの四人で続けていきたいっていうのが余計強くなった。二、三十年たつてこの四人でバンドを続けているのが今は夢かな。その前にブレイクしてお金持ちになってるっていうのも野望(笑)」

—合田さんと山下さんは？

山下「僕もそんな触れられなかったですね。そこまで近くによれないっていうか。何て声かけても嘘っぽくなるし。ただ見守るしかなかったです」

合田「変にネガティブに考えたくないから、とりあえずポジティブにしたいなってすごく思いました。信じた上で気持ちはポジティブに持っていい作品作る、いいライブをやるって」

—そういつたことを乗り越えて三月五日にベストアルバムが出ますが、出そうっていうのはどこからの提案なんですか？

小高「レコード会社さんですね」

—十年目のきっかけに出そう、と。ファン投票の企画もレコード会社さんから？

小高「そうですね。うーん、どうやって話したらいいか難しい。ある程度言っちゃってもいいのかな？要は、じゃあ出しますよっていうくらいの話から始まって」

石川「移籍前とかだいたいベスト出すんですよ」

小高「他聞に漏れず俺らもそういうタイミングで。よく顔も知らないような上にいるおじさんたちがじゃあベスト出そうってね。もちろん喧嘩しましたよ。ただ、周りにいるディレクターやスタッフは俺らの味方だった」

石川「ベストが一番制作にお金をかけずに売ることができるというシステムは仕方ないと思うけど、それを拒否権もなく、ただ出されるっていうのはアーティストとしてどうなんだろうって思ってる」

山下「まだヒットとか飛ばしてるわけじゃないのに、ベストが有無を言わず出ちゃう状況に置かれちゃった」

小高「だったらベストとして意味のあるものにしていうって、ファン投票とかこういうかたちに皆がアイディア出した合ってたんです。ある種の逆襲っていうかね、反抗っていうか、そういうベストにしようっていう。周りで一緒に戦ってくれてる人たち」といってベスト作ろうよって」

石川「普通のベストは一番最後に新曲を入れることが多いんだけど、僕らは最初に入れて、ベストっていう形は取ってるけど気持ちはシングルだよ。『ENTRANCE』っていう曲がリードトラックであとは全部カップリング。カップリングがいっぱいあるシングルだ、みたいなイメージで作ったんです。『ENTRANCE』

出して次のシングル『素晴らしい世界』出してオリジナルアルバム出して流れいいじゃんっていう」

—LUNKHEADはファンに近いバンドっていう印象があるんですが、それが逆に足かせになったり、自分たちを絞めつけてるんじゃないかって感じる時はありますか？

石川「ありますよやっぱり。僕らも近づきたいと思ってる手を伸ばすし、向こうも伸ばしてくるんだって思ってるけど、いざぐつと握ったときにちょっと違和感を感じざるを得ないのがやっぱりどうしても。難しいですね、これは」

小高「近くに感じてれば感じてくれるほど『売れないで欲しい』とか言われる。そういうのは悲しいですね。その距離感ってのが私だけのものって感じになってしまいがちなのは悲しい。物理的な距離じゃないんじゃないのって思うんですけど」

合田「変わったとかいわれるのもちょっとね」

石川「昔『BANDやろうぜ』って雑誌で、清春さんが『ライブハウスでやりたい』って言ってるのを読んだんです。そのときは全然理解が出来なかった。大きいところで満員のお客様さんの前で出来るのになんでライブハウスでやりたいんだろうって。でも今はすごくわかります」

—それでは今後のバンドとしての目標を教えてください。

山下「ブレイク。売れないとやっぱり、やる以上はね」

小高「ドームツアーじゃないですかね、やっぱり」

合田「スマッシュヒットっていう言葉嫌いなんです。なんだそのスマッシュはと。普通の人や俺らが住んでいた田舎の若い子たちが見て、あ、売れてるんだって思えるくらいにはなりたい」

小高「ちゃんとジャッジされるくらいにね。知らないって言われるくらいだったら、嫌いだって言われるほうがいい」

石川「ちょっとやそつとじゃライブで負けない自信がついてきた。ステージに上がったときの四人に対する信頼感っていうのもあるし。だから、やっぱいいライブがしたいですね」

—ではファンと、これからこのベストアルバムやライブをきっかけにする人、読者へ一言ずつお願いします。

小高「今、ベストの次のアルバムを作ってるんですけど、過去最高にいいので、ベストを聴きながら楽しみにしてほしいです」

石川「『ENTRANCE』っていうタイトルが、誰でも来る人拒まないって意味になってるので、たくさんの人に聴いてほしいですね」

合田「やっぱライブに来てほしい。ライブに行く人って多くないと思う



interview with LUNKHEAD

ランクヘッド / 1999年、高校の卒業ライブを機に愛媛で結成。卒業後は別々の進路をたどるも、2000年に東京で改めて結成。2003年リリースの1stミニアルバム『影と煙草と僕と青』が話題を呼び、2004年1月にシングル『白い声』でメジャーデビュー。結成10年目となる今年の3月5日には、初のベストアルバム『ENTRANCE ~BEST OF LUNKHEAD age18-27~』をリリース。その後も4月2日にシングル『素晴らしい世界』、4月16日にNewアルバムをリリース予定。メンバーは写真左より、合田悟 (Ba)、小高芳太郎 (Vo&G)、山下社 (G)、石川龍 (Dr)。